



『安息日の祝福』

説教者: 鄭南哲牧師

聖書本文: 出エジプト記20章8-11節・暗唱聖句: ヘブル人への手紙4章10節 (Rev. Jung nam-chul)

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん! 2025年! 新年あけましておめでとうございます! お正月休みはいかがお過ごしでしたか。本日は2025年元旦礼拝以後、初の主日新年感謝礼拝として捧げます。願わくは、今日から始まった今年中も52週間の全主日礼拝を通して、毎週主の初めの日の主日朝に、礼拝の中で神のご臨在に入り、神様が与えて下さるたましいの安息と平安と力を頂き保って、今年の日まで力強く進み行けるみなさんとなりますように切にお祈り申し上げます!

昨年はいつも神の平安のうちに、心もお体も守られ、強められた一年だったでしょうか。子どもたちは子供たちなりに、大人は大人なり、お年寄りの方も、なぜかみんなが忙しくて、慢性的な疲労や疲れを感じている時代の中で我らは生きています。しかし、一日中職場で汗を流しながら、働いて家に帰って来る時、家庭は我らの安息の源や巣のような場所となるでしょう。我らはいつも疲れた体は休まれ、学校や職場でたまった緊張感やストレスなどで疲れた心の疲労も、家と家族の中に得られる安息によって我々は回復され、新しく力を得て、また翌日、学校や職場に向かえます。

もし、家で適切な休みや安息を取れないなら、我々のすべての行動や心は混乱し、焦り、不安定になり、落ち着かずに、周りとの関係が崩れたり、進むべき人生の方向を失ってしまうかも知れません。

そういうわけで、我らにとって家庭、家族がいるホームというのは我々にとっても一番大切なところであるのに間違いありません。ところが、聖書では家庭や人によって得られる体と心の休みや安息だけではなく、神様から頂ける魂への安息の大切さをも強調しています。どうすれば、我々が新しい新年にもいつも神の安息の中に入り、神の安息を頂き、経験できるでしょうか。

ヘブル人への手紙4章11節にも、「**ですから、だれも、あの不従順の悪い例に倣(なら)って落伍しないように、この安息に入るように努めようではありませんか。**」とされています。

結論で言いますと、人は落伍しないように、一生懸命頑張りながらも、落伍してしまわないように、神様が備えて下さった安息に入り、神の安息を頂かなければならないことを教えて下さっています。

神様は我々が守られるために、神の安息を与えて、神の安息を頂くことにより、我らが続けて守られることを約束されています。本日聖書箇所は、神様が荒野を通られていたイスラエルの民と家庭がさらに祝福され、守られる為に与えて下さった十戒の中で、安息に関する四番目の戒めの内容であります。本文8節には、「**安息日を覚えて、これを聖なるものとせよ。**」という御言葉を通してともに神の御心を知り、神の恵みを共に分かち合いたいと願います。

<①まず神の安息の日を正しく知り、守り行う(真の安息日(主日)は一番最後の日ではなく、一番初めの日)>

正しく安息日を守るためにはまず、安息日がいつであるか正しく知らなければなりません。

本来旧約の安息日は金曜日の日が沈む時から土曜日の日が昇る時まででした。

それは創世記1章に出ている「**夕があり、朝があった。**」という御言葉に従って安息日の始まりを夕方からとしたのです。ユダヤ教とか、カルト異端の中でセブンスデー・アドベンチスト(Seventh-day Adventist, SDA: 日本では「安息日再臨派」と呼ばれ、(日本アドベント・キリスト教団)、系列は三育団体・学校など)では今も日曜日ではなく、毎土曜日に集まって集会を行っています。そしてイエスキリストを救い主として信じません。あるクリスチャンの方々の中では、安息日から主日(日曜日)にただ日にちだけ変わっただけだと考えている方もいます。このようにキリスト・イエスにあって真の安息と安らぎを受けるために、まず、我々は真の安息日についての聖書的な正しい理解が必要です。

厳密に言えば、聖書をよく観察してみると**真の安息日は一週間の一番最後に守る日ではなく、一週間の一番初めに守るべき日**であることがわかります。なぜですか。旧約聖書の創世記を読んで見れば、神様が六日間天地万物を創造される時、人間は一番最後の六日目に造られました。そして、その次の日七日目に休まれたと書かれているので、神様に

とっては七日目に安息を取られたことが分かります。しかし、人にとって見れば、いかがでしょうか。人間が造られた次の日、つまり一番最初に向かえられた日が安息の日になったのが分かります。これは、つまり人間は働いてから、安息に入り休んだのではなく、安息に入り休んでから働いたことが分かります。

創造主なる神は、人をどのようにお造りになられたのかが、どのような生き方、生活リズムで生きれば一番健康よく、幸せに生きられるのかがよく分かります。神は、人がひとまず神様が定め、備えて下さった安息の休みから得られた力とエネルギーによって、六日間頑張ってお働き、生きる存在として神によって造られたのです!!

そういうわけで、カレンダーをよく見て見ると、日本のカレンダーは日曜日を一週間の最後においていますが、特に長い間すでにキリスト教の信仰や影響をもっている西洋のほとんどの多くの国のカレンダーには、休みの日曜日が一週間の一番初めの日となっているのはこのような聖書的な価値観と信仰観から出て来たこと部分であることが分かります。

そして、安息日が週の最後の土曜日から、初めの日(日曜日)変わったのは安息日の主人あるイエスキリストによって、そのように変わったことが分かります。安息日の主人はイエス・キリストご自身であると聖書では記されています。

マタイの福音書12章6-8節で、「6あなたがたに言いますが、ここに宮よりも大いなるものがあります。7『わたしが喜びとするのは真実の愛。いえにえではない』とはどういう意味かを知っていたら、あなたがたは、咎のない者たちを不義に定めはしなかったでしょう。人の子は安息日の主です。」

ここで、主日の意味と始まりは、イスラエルでの安息日の翌日、週の初めの日(マタイ28:1)、その日に十字架につけられ死なれたイエス・キリストが死を打ち破り、よみがえられ救いの御業を完成されたことから変わりました。そのイエスキリストのよみがえられたその日から、イエス・キリストを信じる信仰によって、どんな人々にもすべての罪が赦され、神の永遠の命が与えられる聖書の御言葉の約束通りに成就されました。

そのイエスキリストによって、主の教会は旧約の律法の時代の安息日ではなく、実際イエスキリストの復活の日、つまり、安息日の翌日である週の初めの日(今日の日曜日)にイエスキリストの御名を信じて、罪赦され、救われ神の恵みを受けた者たちは共に集まり礼拝を捧げながら、真の神の安息を頂くことになりました!もはや旧約の安息日から、蘇られた日を安息日として変え、そう定められたのは安息日の主人であられるイエス・キリストによることであったことが分かります!

新約時代に來られた救い主であるイエス・キリストを通して信じ、罪赦され、救われたすべての者たち(クリスチャンたち)が真の安息日の主人であるイエス・キリストが復活された毎週の初めのその日に、集まって主の御名を崇め賛美し、礼拝を捧げられたのが初代教会と主日礼拝の始まりとなりました!なので、今日に至るまで我々は安息日の主人であられるイエス・キリストによって、定められた週の初めの日、日曜日にすべてのキリストの教会は礼拝を行い、守っているわけです。ですから、みなさん、日曜日がただ休みだから、教会で礼拝が行われているわけでは決してなく、むしろ、ちゃんとイエスキリストによって変わり、定められた礼拝をささげながら、神の安息を頂く日だったので、お休みとなって来たことが正しい内容であり、順番であることが分かります。

*使徒の働き20章7節「週の初めの日に、私たちはパンを裂くために集まった。パウロは翌日に出発することにしていたので、人々と語り合い、夜中まで語り続けた。」

*コリント人への手紙第一16章2節「私がそちらに行ってから献金を集めることがないように、あなたがたはそれぞれ、いつも週の初めの日に、収入に応じて、いくらかでも手もとに蓄えておきなさい。」

このように主の始めの日、主日(日曜日)に御言葉を聞き、聖餐が行われ、主の働きと教会のため献金を捧げたのです。そして、使徒ヨハネの時代に生きていた初代教会の牧者イグナティウス(Ignatius)という教父はこう語りました。

“キリストを愛する者たちは、だれでも週の初めの日、主の日を聖く守るべきである”

この主日(日曜日)に、主からの真の安息を頂くために捧げられる礼拝を1600年以上一番大切に信仰の生活の中の一

つとして守られて来て、今日私たちまで渡されているわけなのです。

ですから、愛する信仰の家族のみなさん！毎週主の日の礼拝を最も大切に、聖く守らなければなりません。

まず、主イエスキリストが定められた主の日、主の安息の日に教会の中で礼拝を捧げられる事を最優先に、しっかりと大事に守ることが、神の御臨在の中で神の安息に入り、その安息を実際に頂ける祝福の道である事を忘れないで下さい。

「22家を建てる者たちの捨てた石。それが要(かなえ)の石(イエスキリストの死からよみがえりの事)となった。23これは主がなさったこと。私たちの目には不思議なことだ。24これは主が設(もう)けられた日。この日を楽しみ喜ぼう。(詩篇118篇22-24節)」

こんにちの多くの人々はとっても忙しくて疲れているように見えます。神の安息を頂かないまま、人が働き続けてしまうと、さらに無力感、感情的な浮き沈みが激しくなり、不安、葛藤、煩いから離れられないため、すぐ敏感になり、よく感情的になりやすく、問題をなかなか克服できず大げさに考え込んでしまったり、否定的な思い込みからなかなか抜け出すことが出来なくなります。その根本的な原因は正しく休めなかったからであります。

我々を創造された神様はそんな私たちの限界と弱さをよくご存知だったため、むしろ、創造の秩序通り、私たちの命が長く守られ、健康で祝福される人の人生となるためにも、神様は信じる全ての者たちに、働く前にまず、神の安息日を覚え、その安息日をしっかりと守るように命じられたのです！

例)アメリカのまだ自動車も、車もなかった西部開拓時代に起こった実際の出来事です。一つの群れの馬車がアメリカ中部のセントルイスから西部オーレーガンまで約3300キロを渡る横断し、移動することでした。最初はみんな信仰を持っていたクリスチャンたちだったので、日曜日は礼拝し、安息しながら移動をしないで休みました。ところが、すばやく冬が近づいて来ると、一部の人はあせてしまい大雪が降る前に目的地に着かないといけないという不安のため、安息日にも休まず移動し続けることを提案しました。結局、意見は合わず、二つのグループに分かれて動くことになりました。今まで通り日曜日には礼拝しながら休んだグループと、日曜日に関係なく、ひたすら移動し続けたグループと分かれてましたが、その結果、みなさんはどうなったと思いますか。言う余地もなく日曜日に安息し、休んだチームが結局オーレーガンにもっと早く着いたそうです。安息日に十分休んだ後に、得た活力によって人も、馬も、いのちあるものはもっと早く走り続けることができたのです。

*安息日を守るためには、神様への絶対信仰がなければ守り続けられません。神様への絶対信仰が必要です！

主が我らの為に定められた初めの日、安息日に、神を礼拝し、安息を頂いて休んでも、主が必ず守って下される！助けて下される！決して損にならず、むしろ、必ず益となるように働いてくださるという信仰のゆえに毎週神の安息に入ることが出来るのです！マルバドンという方はこの実話を引用しながら結論的にこう言いました。

“神様はご自分の安息日への戒めを尊重する者たちを尊重される。”

<神の安息を頂く為に、一週間のやって来た仕事を中断する(そうするためには、神を絶対信頼し、委ねる切る信仰)>

ところが、聖書の本文には七日目の日は「どんな仕事もしてはならない」と教えています。

10節を読んでみましょう。「七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはいかなる仕事もしてはならない。あなたも、あなたの息子や娘も、それにあなたの男奴隷や女奴隷、家畜、またあなたの町囲みの中にいる寄留者も。」

この箇所が一番大切なところは「どんな仕事もしてはならない」です。つまり六日間やって来たすべてを止めるべきであることです。

ヘブル語で、安息と言う単語は「シャバット」ですが、これは仕事を中断する、おろすという意味です。神学者であるマルバドンという人は彼の名著[安息]という本で、「仕事を休めるだけではなく、悩み、煩いも、そして、緊張も止めること」だと言っています。愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！私たちが休むべき時、休めない原因はどこにあるでしょうか。それは休んでしまうと、仕事を終えないとかなり自分に損になるのではないかという不安

の思い、自分が動かないと気が済まないの、すべてを監督しないといけないような気がします。分かりやすく言うと、**神様に完全にゆだねられない、任せられないから**です。それを裏付けると、罪のある人はまるで自分がしきりに神のよにやろうとする霊的な高慢と疑い、不従順しようとする心を持っているからであることが分かります。

出エジプト記20章11節の後半には「**それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖なるものとした。**」と言われました。

どんな意味ですか。**安息日は我々の幸福のために神様がご自身で備えられ定められた日**であることです。

神を絶対に信じ、安息日を守る人たちには、決して神様は損にさせない、むしろさらに強めさせ、全てを全う出来るように主が導き恵ませて下さるといふ約束されました。

愛するみなさん！日曜日に神に礼拝しつつ、休むのが、もちろん、しばらく職場上の関係で出来ない方もいるかも知れませんが、出来るかぎり尽くし、神が人をまず休み、神の安息を受けて、その後働くことに造られた存在であり、そうするのが仕事ももっと効率的に、長く続ける健康と力を得られることを忘れないようにしましょう。

心のどこかで、神様が定められた主の安息の日まで私たちは動かないとどこか不安な気持ちがあり、自分がやらなければならないような微妙な焦りをもっていないませんか。**神様は休むべき時には、休めるようにと命じられます。**

この世で一番かわいそうな人がいるなら、それは休まずたえず、死ぬほど働いて結局、突然早く倒れて死んでしまう人ではありませんか。**仕事が健康より、家庭より、神様より、優先になってしまい、大切な全てを失ってしまう残念な結果が今日はどれほど多いのか分かりません。仕事が神様から与えられている使命であり、人生の幸福の為の一つの手段ですが、間違ったら、仕事が自分の人生全てを支配する、一つの偶像の神のようにならないように気を付けなければなりません。仕事自体が人の生きる目的になってはならない**ということです。

神様が安息日を定めたのは、我々の人生と家庭の祝福と幸福のために、安息を守れと命じられたのを大切に覚え是非信じましょう。

<②神の安息を頂く為の前提:六日間神から与えられた仕事に忠実にする>

私たちは十戒の四番目の戒めを覚える時、よく安息だけを強調する傾向がありますが、**本文9節は神の安息を頂く前に、神様が定めた重要な前提**があることを忘れてはいけません。それは、**六日間、自分に任された働きを忠実にしなければならぬ**と強調されていることです！すなわち、**月曜日から土曜日まで、自分に与えられている仕事や働き、責任、役割を忠実に働いた者こそがふさわしい安息を迎えられる**ということです。今日の本文の9節にも「**六日間働いて、あなたのすべての仕事をせよ。**」と命じられています。

新約聖書で使徒パウロも「**働きたくない者は食べるな、と私たちは命じました。**」と命じました。(テサロニケ人への手紙第二3章10節)キリスト教のこのような労働観はキリストの福音が伝えられている所なら、どこでも勤勉な労働文化の花が咲かれ、経済的な先進社会になるようにと寄与(きよ)して来たことが分かります。社会学に大きく貢献したドイツの社会学者であるマックス・ヴェーバーは彼の有名な著書[プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神(The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism)]にこのような事実を述べています。

敬虔なクリスチャンだった清教徒たちはあらゆる職業は、神様からの召命だと信じ、使命を持って一般の人々より忠実に働きました。お金も、**お金の主人は自分ではなく神様**ですから、働いたお金を無駄遣いしないで、節約し、貯金しながら価値のあるところに分け与えて来ました。ですから、クリスチャンが多い国では寄付の文化が作られ、労働や仕事をも大切にこのような精神が、**近代的資本主義を発展させる原動力**となったと指摘しました。**その話しの意味は、労働、仕事、働きは罰ではなく、神様からの与えられたものであり、働けることは感謝で、特権であることを教えてくれた**のです。働くことを卑しく思ったり、働かないで楽に遊びながら、食べようとするのが問題であり、決してそれは祝福ではないことを忘れてはいけません。

ですから、仕事や労働は決して人の罪の結果ではありません！時々、聖書をざっと読む方々の中で、**人間の労働**について

て、墮落の結果もしくは罰の結果だと誤解している方がいます。しかし、覚えるべきなのは人間の墮落の以前にも、人間は働いていたという事実です。

創世記2章15節をみると、「神である主は人を連れて来て、エデンの園に置き、そこを耕(たがや)させ、また守らせた。」人の墮落は楽しいことを、苦しいことに変えてしまったのです。ですから、働くのが苦しくなったら、それは墮落の罪の影響であります。しかし、大切なことは、私たちがもはやキリストにあって新しくされた者であることです。私たちの救いは私たちの働く態度にも影響を与えるべきだと思います。神から与えられた感謝しつつ、働かなければなりません。

フランスの宗教改革者であるジャン・カルヴィン先生は“我々に与えられている職業はどれも卑しいことなく、牧師の働きのみならず、我々がやっているすべての職業は、神様から与えられた尊い働きだと信じて使命を持って最善を尽くすべきである。”と言われました。これを「職業召命論」と言います。教会の牧師や伝道師などの教職者だけがまるで、神様から召しを受けて働くような人々ではなく、誰でも自分に与えられた働きや仕事は、神様の前では等しく大切であり、尊いという信仰の姿勢でした。

これによって以前のヨーロッパの労働者たちは何もしないで、人生を楽しんでいる金持ちの人生をうらやましがり、働かなければならない、決まっている自分たちの人生を悲観的に思い込んでいた労働と仕事に対する考え方も変わる大革命となり、この意識と生き方の転換が、やがては、18世紀半ばから19世紀にかけて起きたヨーロッパの産業革命が起こされ、社会を発展させる原動力になったのを我らは歴史を通して我々は知ることが出来ます。

ですから、神の安息を受け、安息日を守り続けられる健康な家庭となるために、大切な前提は、まず今自身に与えられているすべての仕事が神様からのものであると信じて、忠実に働く者こそ、受けることが可能になることを忘れないでください。

<③神の安息は人のたましいに安息(霊的安息)と祝福を与える>

神様が下さる安息と言われると、一般的に肉体的な安息をまず思い出しますが、より大切なことは霊的な安息です。霊的な休みがない安息は、まことではありません。実際、イエス様が来られた目的もまさに人々に真の霊的な安息を与えるためでした。あの有名なマタイの福音書11章28節にイエス様はこう言われています。

「すべて疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」

我々の人生が休めない根本的な原因は罪からの重荷(罪意識、罪の葛藤、欲望、戦いなど)ですが、イエス様は我らの代わり、ご自分で我々の罪の重荷を負ってくださることにより、我々を自由にされ、救われたのです。

ですから、愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰のみなさん！ある意味で救いというのは、たましいの安息の別の名前だとも言えます。神の安息に入ると言う言葉は、神の救いを味わい、経験するという表現でもあります。

本文の11節に「主は安息日を祝福し、これを聖なるものとした。」と言われます。ここで聖なるものという単語はヘブル語の“カドシュー”とあって、“区別して取っておく”という意味です。信仰の先輩たちは一週間のうちに、この日を区別して神様を礼拝し、聖書を読み、祈りと交わり、そして、きよい読書(Lectio Divina)をしながら、霊的糧を供給していただく時間として過ごして来たのです。

イスラエルの人たちは安息日を意味するもっと上品な単語として、‘シャバット’の代わりに‘メヌハ(menuha)’という単語を使います。‘メヌハ’とは“満たされる平安、落ち着く静けさ、健康な力”を意味します。つまり、日曜日、安息日が単純に何もしない日ではなく、神の霊的な安息と力を頂きながら、喜びと感謝があふれる日であること覚えさせるためにこの単語を使って来たわけであります。そういうわけで、イスラエルの人たちは安息日は神様からの永遠のいのちを頂ける“永遠のメヌハ”だと言いました。

あの有名な詩篇23篇2節に「主は私を緑の牧場にふさせ、いこいのみぎわに伴われます。」の、「いこいのみぎわ」がまさにメヌハなのです。ですから、ヘブル人への手紙4章10・16節には神の安息を得るためにこう書かれています。

「神の安息に入った人は、神がご自分のわざを終えて休まれたように、自分のわざを休むのです。」16節「ですから私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。」我らのたましいの安息、メヌハの安息は安息の日、主の日礼拝の中特別に臨在される神様を通して得られる恵みであります！イエスキリストを信じて救われた我らが、主の日に、主のご臨在の中で礼拝を通して、どこでも得られない、神様からの魂が霊の糧、霊的な恵みと力を供給され、きよめられ、強められる時に、たましいの豊かさ、平安、感謝、喜びが保たれます。このような目的のため一週間のはじめの日、主の日が区別され、神様に礼拝を捧げなければなりません。

クリスチャンは何よりも神様の御言葉と礼拝を通して、また信仰の家族との交わりを通して、霊の安息に入り、神の愛と恵みを分かち合えるのです。

新年2025年から、改めて、週の初めの日、神の安息日に神の安息を頂きながら、神を礼拝し、神の家族と交わりながら、毎週を忠実に働き、生きる人生を、神は必ず益々祝福され、恵まれ、幸せになり、日々健康を保って生きると信じます！私は今日のこの神の御言葉の命令と約束を信じます！みなさんはいかがでしょう。神様からのこの安息への戒めを我が家族が最優先に、大切に守り行い続けることにより、毎週の霊肉、心身ともに神が下さる安息を頂き、神に力づけられ、神様から与えられたまた明日からの使命と責任を果たし続けられる、祝福された元気な全クリスチャンプレイズチャーチの神の家族となりますようにお祈り申し上げます。アーメン！